

## 生き残った『枕草子』

—— 大いなる序章 ——

久下 裕 利

### はじめに

藤原師輔流一門で叔父甥の関係でありながら、道長と伊周との主導権争いは、『小右記』に依れば、花山法皇を射る事、東三条院詮子を呪詛する事及び国家の秘法である太元帥法を私に修する事<sup>(注1)</sup>の三箇条を主な罪状として、内大臣伊周は大宰権帥に、弟の権中納言隆家は出雲権守にそれぞれ左遷となつてはば決着をみたといえよう。

それは長徳二年(九七〇)の変事なのだが、道長にとって姉で一条天皇の母后詮子と自邸土御門第を基点としてようやく共同歩調をとり始めたといえ、娘の入内とその皇子誕生をもって外戚の位地を確保することで摂関体制の基盤が確立することからすれば、左大臣で氏長者とはいえ、いまだ不安定な政権構築であつたことであらう。

奇くも彰子が入内した長保元年(九七九)の十一月、定子は一条帝の第一皇子敦康親王を出産する。定子は長徳二年(九七〇)五月に落飾したはずだから、帝の寵愛も察せられるところだが、既に長徳三年の大赦により召還されて<sup>(注3)</sup>いた伊周・隆家にとってこの上ない慶事であつた。しかし、出産の

ため平生昌邸に第一皇女脩子内親王をともなつての渡御に際しても、道長は宇治の別業への遊覧を計画し、当日は中宮定子の方へは上達部は参ずることがなかったようで、それは道長の権勢を憚つてのことで、『小右記』は「似<sup>レ</sup>妨<sup>二</sup>行啓<sup>一</sup>事」と記している。

定子は長保二年(一〇〇〇)二月、皇后となり、彰子が中宮となつた。<sup>(注4)</sup>同年十二月には第二皇女媛子を出産するが、それがもとで帰らぬ人となつてしまった。定子亡き後も敦康親王の世話役にはしばらくの間妹の御匣殿が当つたが、一条帝の命により中宮彰子の猶子となり、長保三年十一月十三日には彰子の藤壺で着袴の儀も行なわれた(権記)。

彰子に皇子が誕生していない状況下に於いては、道長もかいがいしく親王の面倒をみていたようで、寛弘二、三年(一〇〇五、六)頃は、親王は道長の土御門邸を在所としていたらしい(御堂関白記)。<sup>(注5)</sup>増田繁夫氏は「万一敦康親王が立坊する場合のことを考えた父道長が、彰子の猶子のような形にしておくことで将来に備えたのであらう」とする認識が妥当で、道長の狡猾な慎重さをかいまみることができよう。<sup>(注6)</sup>

一方、伊周は寛弘二年二月二十五日には、座次が大臣の下、大納言の上と定まり、三月二十六日に昇殿を許されることとなった。さらに十一月十

三日に行なわれた敦康親王の読書始に参列し、その夜朝儀に参与せしむる由の宣旨を賜ったのである。こうした一連の伊周の政界復帰を復権として位置づけ過大評価することは慎まなければならないだろう。もちろん、伊周は「一の宮のおはしますをたのもしきものに思し」(大鏡)ていたし、世間の人々も「したには追従し、怖ぢまうしたり」であつたが、寛弘五年(1006)九月、いよいよ彰子腹に敦成親王(後一条天皇)が誕生したのであつた。そして寛弘六年十一月にはつづいて彰子は敦良親王(後朱雀天皇)を出産する。よほど伊周は落胆したのか、病を得て寛弘七年(1007)正月薨じた。享年三十七歳であつた。

寛弘八年(1008)には一条天皇が譲位し、三条天皇が即位するが、その皇太子に誰を据えるのかの議論に、彰子は第一皇子敦康を主張したが、父道長に受け入れられるはずもなく、第二皇子敦成が立太子することとなつた。強引な政局運営に対するこの彰子のささやかな抵抗こそが次の時代頼通期への序曲となつていよう。

こうした政治状況の中で『枕草子』は誕生したのだが、中関白家没落とともに埋もれてしまふばかりか強欲な道長政権によって、敵対した道隆・伊周父子の栄花が記される『枕草子』などは抹殺されかねない運命であつたはずなのである。それが生き残つて伝わってきたことは、その成立と伝流に關してもう少し緻密に時代背景をたどつてみる必要があると思われるのである。

## I 源高明の子、俊賢と経房

源高明は、醍醐天皇の皇子で、一世源氏として太政官の最高位である左

大臣の地位にあつたとき、藤原氏北家内部の権力抗争の巻き添えとなつて、大宰権帥に左遷される。いわゆる安和の変(安和三年(985))であり、この変の意味するところは、小野宮家(実頼・師尹)と九条家(師輔・兼家)との賜姓源氏提携政策のもつてであつて、高明と血縁關係を深めていた師輔方の勢力を削減し、自家の躍進を計ろうとした実頼方との対立構図の顕現であつた。<sup>(注7)</sup>

九条流がその後も賜姓源氏との提携に意欲的であるのは、兼家の源時中拔擢や高明女明子を妾妻とした道長とて同様であつて、高明の三男俊賢(師輔三女腹)を側近とし、四男経房(師輔五女腹)を猶子としていた。その俊賢と経房兄弟が『枕草子』と関わつてくるのである。それも公任との連歌の機知が評価されて、俊賢が「なほ内侍に奏してなさむ」(三卷本、一〇二段)と言つたという、清少納言の宮仕え女房としての出世に關わること<sup>(注8)</sup>と、『枕草子』の流布に直接關与するのが経房(跋之)ということだから、清少納言にとつても『枕草子』にとつても最も重要な案件に高明一統が絡んでくるということなのである。

その際、俊賢と経房が流罪者の子であることと、『枕草子』に登場する彼らは既に道長方の人となつてゐることとの間隙をどのように埋めていくかによつて、彼らの処世や立場も、さらには清少納言の立場や行動を、どのようにに理會するかということ左右しかねないのである。『枕草子』に描かれる同僚の女房たちに扇動されて、清少納言に道長方に通じる裏切り者のレッテルを貼るのかどうかの問題とも連なつてこよう。

源俊賢は道長に限つて登用されたのではなく、俊賢の母師輔三女は伊尹・兼家と同腹の姉妹であつたので、兼家そして道隆にも厚遇されている。そのような俊賢が長徳の変後も中関白家に好意的であつたことを、定子の

在所となっていた二条北宮が焼亡した折、甥の源頼定とともに馳せ参じた

という『小右記』（長徳二年六月九日条）の例などを挙げて、「時勢に流されない気骨ある一面」が認められるとしたのは高橋由紀氏であった。<sup>注(9)</sup>俊賢が

蔵人頭に補されたのは正暦三年（九三二）八月で、「五位而輔蔵人頭越多人」

（古事談）という抜擢を「俊賢卿蒙中関白恩」（傍点筆者）を感じたところ

に拠る俊賢の行動とも理会されよう。また長徳元年（九三〇）八月二十九日

には俊賢が参議（宰相）となるにおよんで、蔵人頭を行成に譲ったのは行

成の祖父伊尹の政権時に父高明が召還され、封戸まで与えられたこと（公

卿補任。天禄三年（九三二）四月二十日）に対する返礼であったかもしれない

である。ともかく信義を重んずる俊賢の気質と考えられよう。

「なほ内侍に奏してなさむ」の記事に「俊賢の宰相」ともあって、長保

元年（九三二）二月と推定されているが、同年正月の中宮定子の入内を憂慮

しつつ、二月九日には彰子の著装の儀があつて、入内準備を着々と進める

道長方の動向からすれば、たとえ恩義に厚い俊賢とて、清少納言を内侍に

推挙するのは不可能に近い状況であつたろう。ここは前段から引き続いて、

『白氏文集』の詩句を翻案しての応答に道隆が培った定子後宮と一条帝と

の紐帯を志す清少納言の内侍幻想を型取っていると見做せよう。<sup>注(10)</sup>

一方、俊賢の異母弟である経房とは、清少納言が里居を知らせるほどの

親交を結んでいた。久保木秀夫氏に拠れば、経房は俊賢とともに兼家政権

下に於いて官途を得ていることから、伯父兼家の庇護を受けていたらしい

とし、道隆には余り眼をかけられずにいて、道長政権下で榮達を遂げてい

るとされる。<sup>注(11)</sup>それはおそらく同母姉明子（高松殿）が道長室となったこと

に関わっていると思われ、「年ごろ大殿の御子のやうに思ひきこえたまへ

り」（榮花物語卷十六「ものとしづく」）とある。道長と父子同然の関係が成

り立ったのであろう。

これは、道長息頼通の正室具平親王女隆姫と同母弟源師房を頼通が猶子

とした如くの関係が想定できようが、賜姓源氏に対する九条家流の姿勢で

あるとともに、極力変や事件の当事者に限定して処罰する氣運が菅原道具

の怨霊以来備わっていたよう<sup>注(12)</sup>で、高明自身やその子孫に対しての厚遇も、

黑板伸夫氏の言う如く、「政治的に無力化された対抗者に対しては融和策

をとる、この時代の上流貴族の行き方としてうけとめればよい」というこ

とになろう。ただ道長にとっては相性の問題もあったよう<sup>注(13)</sup>で、政界復帰後

の隆家には氣を許して迎え入れていたよう<sup>注(14)</sup>で、『榮花物語』には「この君

（隆家―筆者注）はにくき心やはある、帥殿（伊周）の賢さのあまりの心に

ひかるるにこそなどぞ思はしめしける」（卷八「はつはな」）とある。単な

る阿媚追従によって、かつての政敵やその子孫を引き立てることはまずな

かったであろう。

ところで、隆家が長和四年（一〇三三）四月に大宰権帥として赴任する際、

経房に一品宮脩子内親王の万事を依頼して下向したらしく（榮花物語卷十

二「たまのむらぎく」、また寛仁二年（一〇二〇）十二月に薨去した敦康親王の

葬儀の折にも経房は叔父である隆家の代わりに差配を引き受けたよう<sup>注(15)</sup>だ

（卷十四「あさみどり」）から、両者の余程の友好関係が察せられよう。

だが、しかし、長徳二年（九三〇）と推定される清少納言の里居を訪れる

源経房にどのような意図や背後関係があつたものか、それともあくまで清

少納言との私的交渉として把握されるべきなのだろうか。ともかく『枕草

子』の流布事情に関わる跋文（三卷本）を掲出しておこう。

左中將まだ伊勢の守ときこえしとき、里におはしたりしに、端のかた

なりし畳をさし出でしものは、この草子載りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いとひさしくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめり。

経房が伊勢権守となったのは、長徳元年（九七五）正月からで、長徳二年七月二十一日に右近衛権中将、そして長徳四年（九八〇）十月二十二日に左中将に任ぜられている。長徳元年は、その四月十日に道隆が薨しているから、中宮の忌明け後の里居であろうから、長徳二年六月前後と推定できよう。ただ父の服喪の期間であるはずなのに、中納言隆家の従者と右大臣道長の従者とが乱闘騒ぎを起しているし、長徳二年正月十六日には例の花山院奉射事件が勃発する。中関白家側が相当乱れ荒んでいた状況にあったといえよう。ほぼ同時期と思われる一三八段には、

殿などのおほしまさで後、世のなかにこと出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二條殿といふところにおはしますに、なにともなくうたてありしかば、ひさしう里にゐたり。御前わたりのおぼつかなきにこそ、なほえ絶えてあるまじかりけれ。右中将おはして、物語したまふ。（傍線筆者）

とあって、「ひさしう里にゐたり」の時期と前の『枕草子』初稿本の持ち出し時が重なる可能性がある。経房の「右中将」という官職表記を信じれば、七月二十一日以降ということになるが、定子が居る「小二條殿」が伊周の二条北宮であれば、前記した如く六月八日に焼失し、中宮は二条の高階明順邸に遷ることとなる。

真相を手繰り得ない文脈だが、花山院奉射事件の実質も故為光家で遭遇した花山院と伊周・隆家との従者同士の乱闘（小右記）に基因しているとすれば、中関白家側の一種の自壊作用なのだが、そこに断固とした糾明姿勢を示したのが一条天皇であった。その一条天皇の対伊周への指示を『小右記』の記述を追って示したのが倉本一宏氏だが、<sup>注15</sup>中宮定子が遷御した四月二十四日には二条北宮に於いて伊周は大宰権帥に追下すべき勅語を伝えられ、二十五日には定子方に隠れて、伊周は御意に従わなかったようで、帝からの再三の仰せが下された。五月一日には中宮御所に検非違使までが入り探索され、伊周は何処かへ逃走したらしいのである。同日に定子は剃髪している。

このような事件の渦中に身を置く二条北宮（<sup>注16</sup>小二條殿）を忌避しての里居であったのであろうか、それともまた「左の大殿がたの人知るすぢにてあり」という道長方への内通嫌疑による同僚女房たちの誹謗中傷にまみれる状況を回避するためであったのであろうか。里居の理由を一つに限定する必要はなからうが、女房たちの「御里居、いと心憂し。かかるところに住ませたまはむほどは、いみじきことありとも、かならずさぶらふべきものにおぼしめされたるに、かひなく」（傍線筆者）という言を、中宮方を訪れた経房が伝えているところによると、「いみじきことあり」が、いかにも前記の事情を越えるような清少納言の私的理由は想定させ、さらに前掲引用本文に「御前わたりのおぼつかなきにこそ」ともあって、主人定子を気づかいながらの里居であったことになる。

ともかく、ここで源経房が道長方の一員として、その訪問ゆえに清少納言に内通容疑がかけられるということだけは否定されねばならないだ<sup>注17</sup>ろう。つまり、経房の持ち出した初稿本がまず道長方に伝わり、広まって

いくという構図は考えられないところで、「端のかたなりし疊をさし出でしものは、この草子載りて出でにけり」が、あたかも持つて行ってほしいというような意図的な擬装でなければ、余程の信頼関係による油断で、定子後宮に自由に出入りし、清少納言の里居を気がねなく訪れている経房の立場や気質を思うべきなのである。その上、長徳の変に連座して出仕停止の勘事を受けた藤原相尹と源頼定は、ともに縁者で、相尹は高明の四女を妻にしていたから、俊賢、経房にとって義理の兄弟であり、また頼定の母は高明の長女であるから甥である。久保木氏は前掲論考でこれらのことを指摘し、経房にとっても他人事ではないとし、安和の変での父高明の太宰府左遷を思い起こし、中関白家に対して同情の念を禁じ得なかったらしいとする。後年の隆家との交友もそういう経房の心情に根差したところだろうと思われる。

父道隆没後の悲惨で苦難な道を伊周、隆家兄弟とともに歩み出した中宮定子であったが、一筋の光明となり得る徴候が、その身にあった。懷妊である。同僚の女房のだれもが「あやしき御長居」としていた今回の里下りに終止符をうって帰参した最大の理由を、近づく第一子の出産ではなかったかとしたのは坏美奈子氏であったが、<sup>(注18)</sup>それをもってこの謎めいた清少納言の長の里居の意味をまだ解くことはできないであろう。

そこで次のような稲賀敬二氏の言及に耳を傾けることとなる。<sup>(注19)</sup>

私は昔、本誌に書いた旧稿で、経房を枕草子の最初の読者に選んだのは、道長に自分を売り込む意図も内心あったかもしれないと述べたことがある。が、今は、それよりも、中宮に献ずる趣向にかかわる判断だったという考えに傾いている。(傍点筆者)

つまり、清少納言の謎めいた長の里居の意味するところは、『枕草子』の執筆であり、第一子誕生のお祝いとして、中宮定子に献ずるために騒動の渦中に身を置かず、精魂を傾けていたと推断されるのである。

## II 高明の孫、隆国

定子の第一子が皇女であったためか、『枕草子』第一次浄書本は中宮に献上されなかった。<sup>(注20)</sup>では、中宮定子に献上されたのは何時如何なる状況下に於いてなのかといえ、集成された記事の年時からしても、それは第一皇子敦康が誕生する長保元年（九五）十一月七日にあわせて浄書され、長保二年二月十二日の中宮参内ないし、同月十八日の敦康の御百日の儀に献上された可能性が高いと考えている。第一皇子敦康の誕生に中関白家復活のすべてがかかっていた。

しかし、一条天皇の第一皇子敦康に期待せざるを得なかったのは、なにも中関白家側の人々だけではなかった。幼い彰子に皇子誕生の望みがない現在、女院詮子もそして道長さえ九条流の存続と繁栄のために敦康を後見した。一応その経緯については前記してあるが、あらためて倉本一宏氏の説を引用しておこう。<sup>(注21)</sup>

未成熟な彰子に皇子懷妊が期待できず、すでに東宮居貞親王（冷泉皇子。後の三条天皇）には済時（師輔弟の師尹男）女の城子が入っており、敦明親王をはじめとする四人の皇子を出産していて、師輔流からは一人の妃も参入させることができない、という当時の情勢の中で、円融

皇統を守り、師輔流の発展を期すには、権力中枢構成員が一九となつて、唯一の一条皇子である敦康親王を後見し、これを次の東宮に立てるしか、方策はなかったのである。したがって、この時期における敦康の存在は、詮子・道長・一条・彰子といった権力中枢構成員にとっては、きわめて重要な東宮候補だったのであり、それぞれ真剣になつて後見したものと考えられる『権記』には「皇后者国母也。」という言葉が見え、定子を国母と、すなわち敦康を次代の天皇と認識する考えのあったことを示している。

しかし、彰子に寛弘五年（一〇〇六）九月、待望の敦成親王が誕生するに及んで、道長は敦康の後見を放棄し、立太子問題が浮上した時には、行成を使って一条帝の説得工作を行ない強引に敦成を皇太子に据えたのである。ただ敦成の母でありながら彰子は敦康を見限らなかった。その彰子の温情こそが、『枕草子』の由緒ある流布の一経路であつたはずなのである。そして彰子方の、紫式部をはじめとする女房たちに読まれる背景ともなつていたのであらう。

彰子の後見は、父道長の政治的思惑とは異なつて、定子を寵愛した一条帝の意向を汲んでの親身な姿勢であつたに違いなく、そうした心情は長保二年（一〇〇〇）十二月十六日の定子崩御後、より母代としての立場を深く自覚したようである。<sup>注(22)</sup>それは敦康ばかりではなく、伊周の息道雅に対してもやはり一条帝の意向を汲んで後楯となつていたようで、長保六年（一〇〇四）正月六日、十三歳の道雅が彰子御給によつて従五位下に叙せられている。なお伊周の二人の娘は、伊周薨去後、姉大君が高明女明子腹の頼宗の正室となり、妹中君が彰子のもとに女房として出仕したらしい。

ところで、敦康に対してもう一人、好感をもつて対していたのが、彰子の弟であり、次代の為政者である、頼通なのであつた。『小右記』寛仁二年（一〇二〇）十二月二十四日条に「年来同家、朝夕相親」とあり、敦康と親しく交わつていたようである。そして、その交情が頼通の正室隆姫の妹との婚姻を導いたのである。『栄花物語』（巻十二「たまのむらぎく」）には次のように記されている。

大殿の大將殿、この宮の御事をいとふさはしきものに思ひきこえさせたまひて、つねに参り通はせたまふと見しほどに、大將殿の上の御おとうとの中の宮に、この宮を婿取りたてまつらんと申し心ざしたりけるなり。<sup>注(23)</sup>（七二頁）

敦康親王と隆姫の妹、つまり具平親王二女との婚儀は、長和二年（一〇三三）十二月十日（御堂関白記）のことで、もちろんこの儀が彰子の御所枇杷殿で行なわれているのだから、『新編全集』頭注が指摘するように、彰子の世話があつたことは当然であらう。重要なことは、彰子に加えて、頼通までが後見する立場になつたことで、「今はいとど大將殿御後見せさせたまへば、御封などいづれの国の司などかおろかに申し思はんと見えて、いとどしき御有様」なのである。

敦康は結婚五年後の寛仁二年（一〇二〇）十二月十七日に薨去する。その後に残されたのが、長和五年（一〇三六）に生まれた嫡子女王で、既に頼通は嫡子を養女にして自邸に住まわせていた。そして長元十年（一〇三三）正月七日には、頼通は嫡子を後朱雀天皇に入内させたのである。

ともかく定子が遺した敦康親王を介して、国母、女院となる彰子と、そ

の弟で関白となる頼通が手を結んだことは、父道長の強硬な政治路線を一変させる下地が形成されているのであり、道長の家司であり養子でもあった源経房の独自の関白家との関与も次第に許容され、相乗的に『枕草子』の伝流を支えていたと考えられよう。

とくに頼通は家集集成等の文化事業面に於いても格別な意欲を示した為政者で、具平親王息で猶子とした村上源氏の師房、摂津源氏の源頼国、そして高明の孫、源隆国という三人の源氏を取り巻いていた。隆国は、俊賢の二男で、頼通との密着ぶりは『春記』が記すところだが、例えば長久元年(一〇四〇)十一月二十日条に於いて石清水臨時祭の試案に関白が「親々公卿已下」を率いて参内した中に、長家、師房の次に隆国の名が挙げられている。<sup>(注26)</sup> 記主資房は追従として隆国を批判するが、頼通は参議としてそれなりに評価していたようである。

十八歳で正五位下の源隆国は、寛仁五年(一〇三三)正月二十六日、蔵人に補されたが、六位の蔵人には後年『更級日記』作者菅原孝標女が憧れる源資通と、清少納言の前夫であった橘則光との間に生まれた橘則長が居た。

この三人の同僚関係は、治安三年(一〇三三)まで続いたが、この間に隆国と則長とは何かしらの交渉があったかもしれないのである。

また頼通の家司であり和歌六人党の一人である藤原範永は、隆国、則長が補任した前年の寛仁四年まで六位の蔵人であった。その家集『範永集』<sup>(注27)</sup>

(一〇九)には、

女院にさぶらふ清少納言がむすめこまが草子をかりて、

かへすとて、

いにしへのよにちりにけることはをかきあつめけむひとのこころよ

かへし

ちりつめることのはしれる君みずはかきあつめてもかひなからまし

とある。清少納言の娘小馬は上東門院彰子に仕えていたが、範永の依頼により「草子」を貸したらしい。書(搔)き集めたこの「草子」というのは、おそらく「いにしへのよにちりにける」母清少納言の歌集のことだろうが、『枕草子』を含まないとは限らないだろう。というのは、範永と能因との交渉が『範永集』(九八―一〇〇)や『後拾遺集』(巻一、春上、一一八)によって知られるから、現存する『枕草子』にある「伝能因所持本」の伝流経路の一つとして、その可能性を考えることができる。また能因は同じ橘氏の出であり、妹を妻にしている則長とも親交をもっていた(能因法師集)から、いわゆる能因本の伝来のルートは、おおよそこのような接点に於いて確かなのであろう。

ところで、例えば三巻本にはなく、能因本にのみ存する次のような記事を如何に考えるのかにあたっては、慎重な背景を想定すべきであろう。

今上一の宮、まだ童にておはしますが、御をちに、上達部などのわかやかに清けなるに、抱かれさせたまひて、殿上人など召し使ひ、御馬引かせて御覧じあそばせたまへる、思ふ事おはせじとおぼゆ。

(九二段。小学館『全集』二〇二頁)

この記事の存在の意味を今上一の宮つまり敦康の成長を見守りつつある、中関白家伊周の復権に根差すというだけでは論拠に欠ける恨みがあるろう。

「めでたきもの」段の最後に付加されたような仮想めいた記事を、現実の

歴史上に位置づけた加藤静子氏に拠ると、<sup>注(29)</sup>長保四年（1003）九月十四日、隆家が権中納言に更任してから間もなく敦康の世話に加わるらしいから、場面は隆家邸とは限定されないものの、「御をぢ」とは伊周ではなく、隆家なのであろう。

加えて、『全集』頭注には「この記事は生後一年以内の事か、または定子崩御後作者がまだ宮仕えをしていた折の事となるう。「思ふ事おはせじ」の語からみて前者とするが、「童にて云々」の語はもう少し年長をさすようでもある」（二〇二頁）と指摘するのだが、生後一年以内の赤子が、「殿上人など召し使ひ、御馬引かせて御覧じあそばさすのは無理というもので、やはり童の時期が想定され、それが作者を清少納言とする頑な視点から、『枕草子』執筆の下限を長保三年八月とし、なお清少納言は定子崩御後宮仕えを退いたという通説に従っている読解なのであろう。これを、長保四・五年、敦康満三・四歳頃、にぎやかに殿上人などに囲まれた道長邸での情景とみ、それを目撃し、筆録したのは清少納言ではなく、その娘の小馬なのだとするような理会にはできないのであろうか。少なくとも『枕草子』の記事に清少納言以外の余人の手が入らないという認識はあらためる必要がある。

ともかく、和歌六人党が敬仰する能因と清少納言息則長との関係をみたならば、当然六人党が仰ぐもうひとり、女流歌人の相模と則長との関係にも目を向けねばなるまい。相模は能因とも交友関係にあった相模守大江公資<sup>よみ</sup>の妻であったが、その結婚中にも公任息定頼と忍ぶ仲であって、存外多情な女性であった。そして、則長と相模との結婚が、公資との結婚より早い時期に想定され得るのである。<sup>注(30)</sup>つまり、相模も則長を介して清少納言自筆の『枕草子』を見る機会があったかもしれないのである。

相模の走湯百首の「花さきし草とも見えず枯れたるに雪こそ庭の面隠しなれ」（相模集<sup>272</sup>）や「あづまやの軒の垂水を見渡せばただ白銀を暮けるなりけり」（<sup>277</sup>）という二首は、『枕草子』能因本二八二段（三卷本二八五段）の「あやしき賤の屋も雪にみな面がくして」及び「白銀など暮きたるやうなるに」から撰取された表現であり得る可能性を西山秀人氏は指摘しているのである。<sup>注(31)</sup>

相模は上京後間もなくして公資と別れたようで、その後、親密な関係となったのは七歳程年下の源資通であった。<sup>注(32)</sup>長元八年（1015）五月十六日関白左大臣頼通家歌合（賀陽院水閣歌合）では、左の方人に相模、四条中納言定頼、公資、能因が居並び、右中弁源資通は右の講師であり、右兵衛督源隆国が右方の念人のひとりであった。晴の盛儀に混沌とした私情を潜ませていたのであろう。ただ則長は前年、遠国で客死していた。

この頃、相模は定子所生、入道一品宮脩子内親王のもとに出仕していたから、『枕草子』的世界に親近していたことになる。かつての夫公資の母が伊周家の女房であった縁からの出仕とする説もあるが、<sup>注(33)</sup>相模の養父が頼国の父源頼光であり、その頼光家との関係を重視すべきであろう。源資通にしても母が頼光女だから相模は義理の叔母ということになる。

和歌六人党の頼家と頼国息の頼実<sup>よみ</sup>は叔父と甥の関係で、頼実の異母弟で多田源氏として知られる頼綱の母が尾張守藤原仲清女であったから、範永は頼綱の叔父に当ることになるし、また範永は永頼二女を母とするから、頼実とも母方の縁でつながっている。その『範永集』（七四）には、また、

西宮にて、落葉雨の如し

夜もすがら紅葉は雨と降りつむに眺むる月ぞくもらざりける

とあって、当時和歌六人党やその周辺の歌人たちが参集して私的歌会を催す場が、源師房邸であったり、伏見の橋俊綱（頼通実子）邸であったりするのだが、そのひとつに西宮邸があった。この長久四年（二〇四）冬の同座と思われる詠が、『家経集』『経衡集』にも存するが、その家経詠とともに、頼実の「木の葉散る宿は聞き分くことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も」も、『後拾遺集』に「落葉如雨といふ心をよめる」の詞書をともなつて採歌されている。<sup>注(34)</sup>

詠歌の場となつた荒廢した西宮邸は、かつて西宮左大臣源高明の邸宅であつたのだが、『類題鈔』の「行客吹笛」の題を記す見出しに「隆国有事 永承四 於西宮 講之」とあるところから、隆国が当歌会の主催者であり、西宮邸の伝領者と推断したのが久保木秀夫氏であつた。<sup>注(35)</sup>この隆国と頼実との接点が、頼実と母（永頼二男信理女）を同じくする妹である『狭衣物語』作者六条斎院祓子内親王家宣旨を隆国と結びつける機縁となつたのではないかと臆測しているのである。<sup>注(36)</sup>

『狭衣物語』の『枕草子』の享受ないし摂取は、「ほのぼの明け行く山際、春曙ならねどをかし」（巻一。内閣文庫本）によつて明らかだが、なお三谷栄一氏は「寺は」段に於いて、三巻本で「靈山は釈迦仏の御すみかなるがあらはれるなり」となっている箇所が、能因本では「高野は、弘法大師の御すみかなるがあらはれるなり」となっていて、それが『狭衣物語』巻二の、主人公が高野、粉河に詣でようとする場面に、「弘法大師の御すみか尋ね見たてまつりて、猶この世をも逃れなん」（大系本）とある本文と関わることを指摘して、「狭衣物語は能因本系によつたと断定してよいのではあるまいか」としている。<sup>注(37)</sup>

現存伝能因所持本の奥書には、「枕草子は、人ごとに持たれども、まことによき本は世にありがたき物なり。これもさまざまはなけれど、能因が本と聞けば、むげにはあらじと思ひて、書き写してさぶらふぞ」とあって、さらに「さきの一条院の一品の宮の本とて見しこそ、めでたかりしか」と記されている。「一条院の一品の宮」とは一品宮脩子内親王のことで、つまり相模が晩年直に手にする可能性があつた本で、三谷氏はこれを清少納言自筆の献上本だとする。そしてこの一品宮本は、脩子が頼宗女で伊周女腹の延子を養女としていたから、「恐らく延子に伝わり、姫子にも愛玩され、愛読されていたに相違ない」と述べている。<sup>注(38)</sup>

後朱雀天皇の後宮には伊周や定子の遺子関係者として延子と姫子（敦康親王女）、そして姫子の姫君たちである祐子、祓子内親王が居て、その存在は献上本の伝播ルートとして看過できないのであるが、一方で前述した如く、定子、脩子内親王方に関わる高明一統の存在をはじめとして、敦康を猶子とする彰子方及び頼通の家司受領としての和歌六人党の存在、また蔵人所での隆国と則長との接点及び則長と能因との関係、そして祓子の家司であつた師房との関係、<sup>注(39)</sup>さらには頼光一統とりわけ頼国妻子の血縁及び人脈が『枕草子』の伝流の系譜を形成して、「枕草子は、人ごとに持たれることになつたのであらう。

入道一品宮脩子内親王は、永承四年（二〇五）二月、五十四歳で薨じることが、その年の冬、西宮邸では前記した「行客吹笛」の題で、家経、経衡、範永等が参集した歌会があつた。範永詠は「笛の音の過ぎ行くよりは紅葉の宿の嵐は身にぞしみけり」というものだが、「行客吹笛」という題の新しさは、<sup>注(40)</sup>『枕草子』「笛は」段の「笛は、横笛いみじうをかし。遠うより聞ゆるが、近うなりもて行くも、いとをかし。近かりつる声、はるかに聞えて、

いとはのかなるも、いとをかし」(能因本二〇二段)に拠るのかもしれない。

## 注

- (1) 藤本孝一「藤原伊周呪詛事件について―宿曜師利原を中心にして―」(『風俗』昭和55年6月)は、太元帥法によって道長の運命を没せしめるための呪詛を行なわせたとする。
- (2) 池田尚隆「里内裏と行幸―一条天皇と藤原道長の距離―」(『ことが拓く古代文学史』笠間書院、平成11年)
- (3) 『栄花物語』は親王の誕生によって召還されたとする。
- (4) 瀧浪貞子「女御・中宮・女院―後宮の再編成―」(『論集平安文学』3 平安文学の視角―女性―)勉誠社、平成7年)は、中宮は天皇の生母としての伝統的理会上に立って定子を皇后、彰子の中宮としたのは、立后時期の前後による呼称の違いではなく、彰子が中宮であることの意義を重視した道長の措置であったとする。
- (5) 山中裕『平安人物志』(東京大学出版会、昭和49年)「第五章 敦康親王」に拠る。
- (6) 増田繁夫『源氏物語と貴族社会』(吉川弘文館、平成14年)「序章 過渡期としての一条朝 二 藤原伊周の生涯」
- (7) 山口博『王朝歌壇の研究』<sup>村上天皇</sup><sub>内親王</sub>(桜楓社、昭和42年)「源高明論」に拠る。山口氏は「賜姓源氏」の存在を許そうとする勢力と、政界から駆逐する事により、藤原独裁政権の確立を狙う勢力との対立と言える」(二六頁)とも述べている。史学界の主流的認識である他氏排斥論とは異なるが、山口説に賛する。また山中説は少しく流動的だが『平安朝の古記録と貴族文化』(思文閣出版、昭和63年)等は、山口説と類同する。
- (8) 「女は」(二七一)段に「女は、内侍のすけ、内侍」とあって、女房の最高職

として意識されている。

- (9) 高橋由記「源俊賢考―王朝女流文学の史的基層として―」(『中古文学』64、平成11年11月)
- (10) 藤本宗利「中関白と呼ばれた人―藤原道隆の創ったもの―」(『国語と国文学』平成14年5月)は、道隆の妻の高階成忠の娘貴子が、拔群の漢才をもって宮仕えする高内侍と称された女性であったところに、道隆がめざすサロン形成があったとする。
- (11) 久保木秀夫「枕草子における源経房」(『日本大学「語文」』98、平成9年6月)
- (12) 『小右記』長和四年(一〇三三)十二月十三日条に、左大将頼通の病氣時に伊周の霊が出現した記載がある。
- (13) 黒板伸夫「撰関制展開期における賜姓源氏―特に安和の変を中心として―」(『撰関時代史論集』吉川弘文館、昭和55年)
- (14) 久保木氏前掲論考に拠る。
- (15) 倉本一宏『撰関政治の王朝貴族』(吉川弘文館、平成12年)「第一部第五章 藤原伊周の栄光と没落」
- (16) 『日本紀略』正暦五年(九九四)八月二十二日条に「以権大納言同伊周為内大臣、公卿相率向内大臣、第小二条、有饗禄事」(傍点筆者)とある。このことは既に増田繁夫「朧月夜と二条后」(大阪市立大学「人文研究」31、昭和55年3月。王朝物語研究会編『研究講座 源氏物語の視界―准拠と引用―』新典社、平成6年に再録)に指摘がある。なお萩谷朴「三卷本枕草子実録の章段の史実年時と執筆年時の考証」(『古代文学論叢第三輯』源氏物語・枕草子研究と資料)武蔵野書院、昭和48年)に於いては「小二条殿」は高階明順の小二条宅との認識である。また浜口俊裕「花山法皇奉射事件」(『東洋研究』94、平成2年2月)も同断だが、邸宅の位置関係が異なる。三卷本九五段には明順邸は「明順の朝臣の家」として描出されている。
- (17) 手のひらを返すように道長方への追従が明らかな齊信との関係を疑われた

らしい。加藤静子「枕草子の背景―中関白家と斉信・成信―」(『東京成徳短期大学紀要』14、昭和56年3月)。久保木秀夫前掲論考等。

- (18) 坪美奈子「『枕草子』「長徳の変」関連章段の解釈―後宮の視点によって描かれた政変―」(『中古文学』71、平成15年5月。のち『新しい枕草子論』新典社、平成16年)

- (19) 稲賀敬二「『畳』に座した『草子』・謎の演出」(『国文学』昭和63年4月。のち『源氏物語の研究―物語流通機構論』笠間書院、平成5年)。引用本文中の旧稿とは「同時代人の見た枕草子」(『国文学』昭和42年3月)である。

- (20) 稲賀敬二前掲論考には「伊周の「紙」献上が長徳二年初春、第一次浄書本は同年初夏に完成したが、ちょうど伊周たちの配流事件が起って、清女がこの浄書本を献ずる雰囲気ではなかったのだと、私は考える」とある。

- (21) 前掲書二六七頁。

- (22) 『小右記』長和四年(三三三)十二月廿五日条に「道雅故院可相願由被聞皇太后」とある。

- (23) 引用は小学館新編全集『栄花物語②』に拠る。

- (24) 『栄花』(巻二十三「こまくらへの行幸」)には万寿元年(三三三)九月十九日に催された駒競の後宴の和歌序に「多くの政をすべおこなはせたまふ左大臣も、妹背の山の雲もへだたらぬ御仲らひなり」と記すのは、太皇太后宮彰子と頼通姉弟の親密な仲をいう。なお三原まきは「高陽院行幸和歌の性格」(久下裕利編『狭衣物語の新研究―頼通の時代を考える』新典社、平成15年)が詳しい。

- (25) 和田律子「後冷泉朝の藤原頼通―『四条宮下野集』を軸として―」(『立教大学日本文学』85、平成13年1月)「後冷泉朝期文化圏と藤原頼通―平等院を中心として―」(『王朝物語研究会編『論叢狭衣物語2―歴史との往還―』新典社、平成13年)等に詳述されている。

- (26) 黒板伸夫「藤原行成の子息たち―後期摂関時代の政治と人脈を背景に―」(『後期摂関時代史の研究』吉川弘文館、平成2年。のち『平安王朝の宮廷社会』吉川弘文館、

平成7年)に拠る。また明子腹でも倫子の子となった長家は頼通と親しい間柄であり、長家は行成女と結婚している。さらに行成三男行経と隆国は親しく、黒板氏は「行経の摂関家側近への進出には長家との連携が大きな力となったことは疑いない」と述べる。

- (27) 『赤染衛門集』に記される「関白殿に集ども集めさせ給ふ」という頼通の家族集成事業の一環として『範永集』『経衡集』も考えられると、橋本不美男『桂宮本叢書第三巻』(養徳社、昭和27年)解題が指摘する。他に『伊勢大輔集』『能因法師集』『四条宮下野集』『為仲集』等が、その目的の集成として考えられよう。範永が頼通の意向を受けて『清少納言集』編集を目論んだのかもれない。

- (28) 早稲田大学文学研究科所蔵二十一代集本『後拾遺和歌抄』十六「小馬命婦」(九〇九番歌)の勅物に「前摂津守藤原陳世朝臣女、母清少納言、上東門院女房、童名狛俗称小馬」とあり、小馬の父は藤原陳世である。また彰子が「女院」と呼ばれるのは万寿三年(三三三)からである。

- (29) 加藤静子「一の宮敦康親王の周辺―枕草子能因本「めでたきもの」段の背景―」(鈴木一雄編『平安時代の和歌と物語』桜楓社、昭和58年)

- (30) 稲賀敬二「後冷泉朝の歌壇」(『講座日本文学4中古編II』三省堂、昭和43年)、川村晃生『摂関期和歌史の研究』(三弥井書店、平成3年)「第一章第一節能因法師研究」

- (31) 西山秀人「『枕草子』の新しい―後拾遺時代和歌との接点―」(上田女子短期大学「学海」10、平成6年3月)

- (32) 『後拾遺和歌集新釈下巻』(笠間書院、平成9年)には、資通は「寛弘二年(一〇一五)の出生で、相模生年を長徳四年(九六六)とすれば、七歳年下になる」(二六七頁)とある。

- (33) 満田みゆき「相模伝説論―中期以後の軌跡―」(『大養廉編『古典和歌論叢』明治書院、昭和63年)

- (34) 高重久美「落葉」の音―源頼実の歌を通して―（『文学史研究』39、平成10年12月）。同論は当歌によって能因―頼実―俊頼という歌風の系譜を説いている。
- (35) 久保木秀夫「和歌六人党と西宮歌会」（『中古文学』66、平成12年12月）。また久保木説に対し、西宮邸の主は源長季だとする反論が高重久美「西宮邸―和歌六人党の詠歌の場―」（前掲『狭衣物語の新研究』）にある。
- (36) 宣旨については拙著『狭衣物語の人物と方法』（新典社、平成5年）「狭衣作者六条斎院宣旨略伝考」を参照。
- (37) 三谷栄一「枕草子の影響―狭衣物語その他」（『枕草子講座第四巻』有精堂、昭和51年）
- (38) 三谷氏は岩波大系『狭衣物語』の解説では「定子―敦康親王―嬬子―禊子という順に枕草子が伝来した」と指摘している。
- (39) 師房の六条邸には二男・顕房も住んでいたらしい。天喜四年（1054）五月、頭中将・顕房歌合には『枕草子』三巻本勘物に記される則長息の則季が出詠している。
- (40) 和田律子「『更級日記』「萩の葉」段の笛吹く人をめぐって」（『日記文学研究誌』6、平成16年3月）は『更級日記』「萩の葉」段との接点を、また同氏「『更級日記』論にむけて―「萩の葉」の段から考える―」（『更級日記の新研究―孝標女の世界を考える』新典社、平成16年）は、その「萩の葉」段と『源氏』蜻蛉巻との関連を述べる。